

水路管理通路に手すりを設置

およそ1年ほど使用した仮の手すりも、きれいに撤去するとなくなかなか時間がかかります。打ち込んだ杭などは、簡単には抜き取れませんでした。

地域内で一番北側に位置する農道は水路との高低差が大きく、農業用水の管理には急な斜面をつたい降りるような状況が続いていました。

本年度の始めの事業として、ここに上り下り用の通路を設置しました。そ



の際には、足場の確保だけで十分だと考えていたのですが、やはり実際に使ってみると、歩行に若干の不安がありました。そこで、木材と竹で仮ごしらえの手すりを取り付けました。

2月に行った役員会では、仮の手すりを不安とする意見が出て、検討の結果、作り直すことに決まりました。

2月21日の午後、業者の協力も得て、鉄製の手すりの設置を行いました。今までの仮の手すりを撤去し、鉄パイプを通路部分に溶接して支柱を立てていきました。

最終的な溶接は専門家に依頼しましたが、位置決めや仮付けのための部材の保持など作業は少なくありませんでした。

渡り板にゲートを追加

今回はこれとは別に、下流2カ所の水路の渡り板の入り口にゲートを取り付け、安全性を向上させました。多少通行には手間のかかる思いがあるかも知れませんが、必要以外の進入を防ぐ意味でも必要なものだと考えています。

地区内には何カ所か共有林があります。今のように外国製の木材が氾濫していない頃は、貴重な建築材料として有効に使われていたようです。

現在ではこれらの共有林はあまり価値の高いものではないとして、ほとんど手入れされないままになっている状況です。

みんなの森を見に行く

4班と5班で構成される中は組は2カ所の共有林があります。しかし、ここ10年以上共同での手入れなどの作業を行ったことがありません。このままだと世代が変わる中で忘れられてしまう可能性もあるので、2月22日に現地まで行って、森を確認して来ることになりました。

できるだけ若い方の参加を呼びかけました。それぞれの家庭の中で共有林や山道を語り続け、受け継がれていくようにと計画されました。

当日は曇り空、午後からは雨模様の予報でしたので、午前中の僅かな時間で道と山林の状況を確認してきました。山道は傷んだところもありましたが歩くことはできました。40年以上経過した杉や檜の中には、立派に育ったものも多くありました。

第3回「もっパラおごおり」迫る

小郡地域のまちづくり推進事業「もっパラおごおり」が3月28日(土曜日)に開催されます。

今回は地元の貴重な観光資源でもある「SLやまぐち号」の今年の出発式に日にちを合わせて開催されます。SLの出発と呼応して新山口駅から小郡ふれあいセンターまで消防音楽隊など、いろいろな活動グループがパレードを行います。どうかご声援ください。小郡ふれあいセンターでは例年のように各種のイベントが行われます。八方原地区か



大好評だった生活改善グループのうどん販売(第2回大会)

らも生活改善グループのうどん販売や、ふれあい朝市の出店など関係する方が少なくありません。また個人的に

参加グループの一員としてパレードやイベントに参加される方もいらっしゃると思います。

「おごおり」らしいまつりとして、市内外の方々の参加で楽しい、賑やかなイベントになる予定です。

右折レーンがびびるよ

岡田地区の県道山口小郡秋穂線と市道の交差点改良工事が大詰めを迎えています。

元橋方面から八方原地区に右折しようとする後続車に追突されるなど、危険性の高さが指摘されていました。路線バスも当初予定のコースを変更し

て、八方原橋交差点から地区に進入するようにしたのは、安全上からも正しい選択だったと思います。

今後は、右折レーンが設けられるので、後続車への影響は少なくなります。ただ、今まで地区内から県道へ出る時にかなり斜めに出ることができましたが、今後は普通の交差点のようにハンドルを大きく切るような形になると思われます。

何はともあれ、安全第一でまいりましょう。

今年も見たい「ふしの夏まつり」

小郡の夏の風物詩「ふしの夏まつり」の開催が危ぶまれています。厳島神社の例祭として歴史のあるまつりに、花火大会が加わる独特のお祭りでした。

新幹線高架橋の建設などで開催が困難になった時期もありましたが、現在の形になって30年の伝統があります。

しかし、運営母体となっていた吉南青年会議所がこの活動に対して「今まで通りにはできない」と意見を発表しました。ふしのまつり実行委員会では、検討を重ねていますが、いまだに方向性が見いだせないままです。

なんとか力を合わせて、まつりが続けられると良いですね。

雀だっって役に立っている

毎日新聞2月4日付けのコラム「余録」に、雀が少なくなつたという記事が載っていました。都市部では半世紀前の1割程度にまで減っている。えさ場になる場所が激減しているためではないかという内容でした。

日本では雀を捕獲することはそう多くなかったようです

が、歴史的に諸外国ではいろいろな事件があったことが記されています。

18世紀のプロイセン(現在のドイツと重なる)フリードリヒ大王は、大のサクランボ好きだったので、サクラ

ンボを食い荒らす雀の駆除を命じました。するとたちまち害虫が大発生しサクランボも大打撃。大王は一転して鳥類保護に乗り出しました。

20世紀の中国でも毛沢東率いる中国はネズミなどと

もに農作物を食い荒らす雀の一掃に乗り出しました。一説には11億羽が捕獲されたとのこと

すが、害虫や雑草がまん延して大凶作になりました。やがて駆除令は撤回されることになったとのこと

やはり、自然のサイクルに無理な歯止めをかけるのは人間の思い上がりのようです。